帝鑑圖説 十

WA 7
(7)
237

十

帝鑑図説　8冊　WA7-237　07-001
国立国会図書館

帝鑑圖説巻第十目録

五侯擅權　漢乃成帝
市里徵行　漢乃成帝
寵昵飛燕　漢の成帝
嬖信戮賢　漢乃哀帝
十侍乱政　漢乃桓帝
西邸鬻爵　漢の霊帝
列肆後宮　漢乃霊帝
芳林營建　魏乃明帝
羊車遊宴　晉の武帝

昭和廿二年八月四日
山口誠太郎氏寄贈

書
12.11.10
国会図

00W90934

契祖倹徳

宋の列後

帝鑑圖説巻第十

五侯擅權

漢の成帝とよて御門一人御しまとがはじめて御位にはりせ給ふ時御ちゝかされば一門みな王うじの人々をよびいださ被給ひてりづ川ともうりらうんにあげ給ふまげられおりり母王鳳とやせしをぞ大司だれらんよあげ給ひて大将軍になされよろづ天下のまつりごとはなぞ王鳳ありまつ扱給へりそのかり王譚王商王立王根王逢時この五人なぞおなし日にすべて侯乃くらゐにおし奉りる故よ時乃人この五人を名づけて五侯ともやうりとうなよ批文

人をそんじあげ給ふ時よりもにさなり労おほかりし紀
ろうあれをいうにとなげぬるに成帝いまくらゐに
そなはり給ひてより一族の人々をおもくもちゐし
いぶし高官にあげていせひよおごり給ふ極人天だ
あれをいましめ給ふ事あくさうなりしかども成
帝これをあそばしさらにきかずしかし其名
後又王商王根こ乃二人するなわち王鳳をりいつく
天下のまつりごとをほしいまゝにしていせひよおごる
あまりにもかし也と紀御一門をうらじれ人々今を
うざむくといふをおもりいかりあらひし事をうらく
ぬりをなるに成帝かぎりてまれあやうしいや世ぞ

そのおよそ二十五人とうやそのおりうれ諸官人時乃
いせひにおそれ此二十五人の一族へ我もくと
いぞいり賄賂をさゝげて四方よりさゝろ君たゆる
ひまなかりけりあまりきらびれ人々すぎひふ
いせひをあらそふて宗花をうつくしとしほせ
あるひもおごりさり家をたてくるまもいとうるため
あるひ赤墀をなし連頂をなしてひうかに椒中乃
ていをまなぶり又園乃うちに土山とつづきそうて
あはしそのうへにてんしの白虎殿をひようせり
又長安城乃墻をきりきちろの外より灃水乃うち
いれ我が庭にながいれうちはへいめてたちこれを

いけとなせりそれたゞ后事かくのおこりしらしを
よりくしよきんにんいけまも工書して君を諫て
いろくいさめまうしのんくちいせひあるそござさ
かんかしてもいふ王におごまり給ふもくおかたう
乃事どもきんせい志給へりしとや歎しけども成帝此
事承ずることもなしいれおし悔さどこれによりて
もうぢ乃人くちいよゝくう給とりしひまて
みな御おそれいくうち事取りし麦成帝れ御子なり
平帝と申せしありけるふあまりつけ給へども
いまのごようせうに御しますゆへ御一門乃ものから
に王莽といひしそのひめりいせひよたゞきてのり

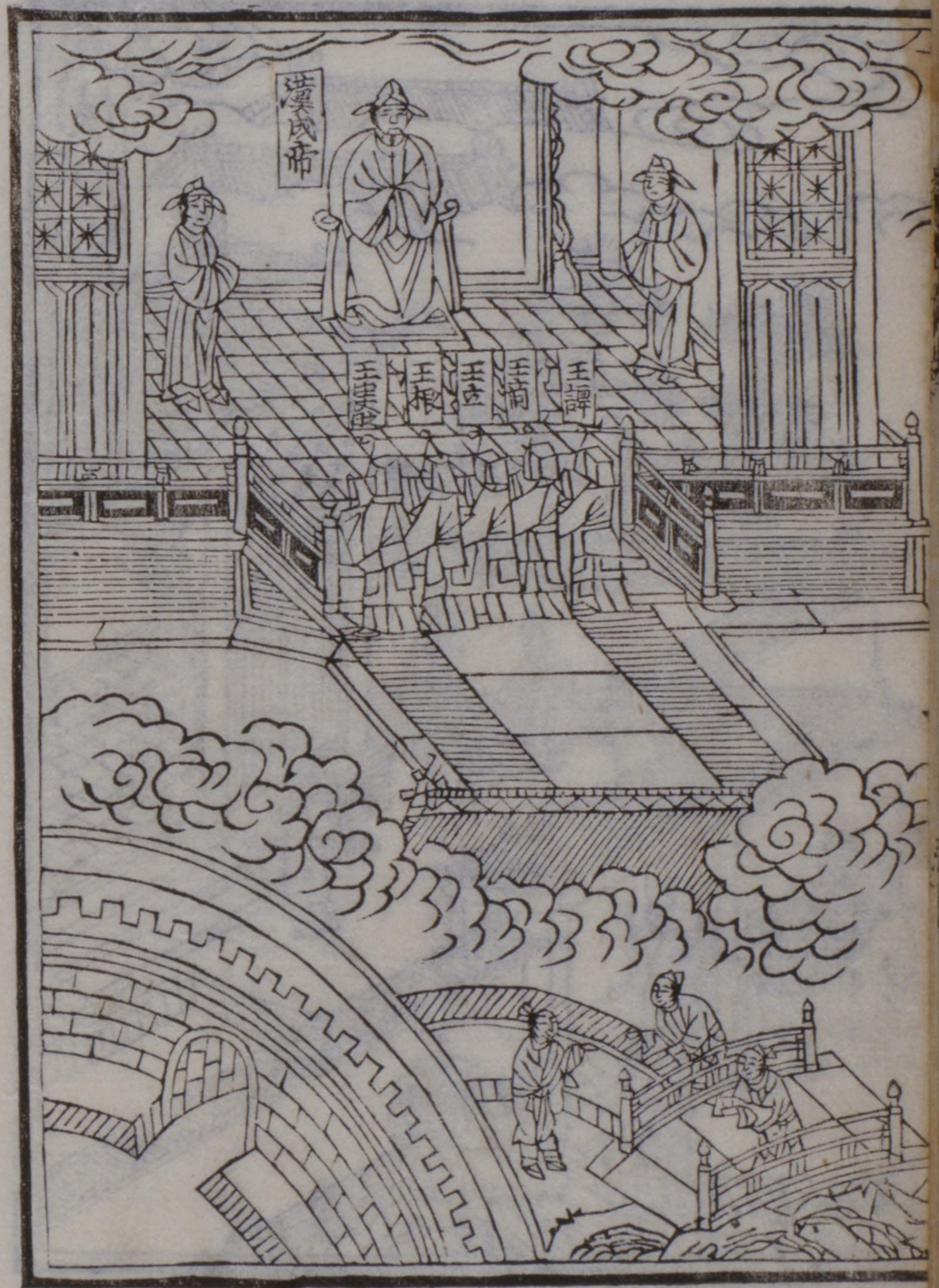
ちう天下乃まつりごとをもおほくにおさめしかど
天下こと〴〵く王莽が手にきざしけり故に王莽は平
帝を弑しそまつりて漢の天下をうばひとり
みづから天子にそなはりまつりそれ天下乃君たる為さ
人もその一門乃ともがらまで金銀をあたへてかけ
みなさる為志もの天下のまつりごとにあてても
見れありけり一ぞくにならびなかりきこの王莽が
國うしなひてまわりはへりけるまでかぐこと
あるべき事ならし

五侯擅権

帝鑑図説　8冊　WA7-237　07-006
国立国会図書館

市里徴行

漢の成帝はうかうに禁中をしのびいでゝかりそめにゆう
らん遊しませし事はこのみかどよりはじまりにしのび
いで給ふをそれ天子たる事を人にしらせまじき
故人ありきによれてくるしかるまじと又百官
公家の御さたをくはしいやしき下人をめしつれ給ひ
てあるときは小車にめし又ある時はたれともしれぬ下人
のうちあじ里などしてあるひは馬をかりけれて
あるひは市にいりてあそびあるひは野をまわりありく
城をなぐさめてさとく鄰京のさとにいりて
雑説さうまちあるをひろせて論じてゆうらく



帝鑑図説 8冊 WA7-237 07-007
国立国会図書館

せ微行ひたりまゝに張放とやらいて一人の随下なり
くらゐは富平侯にまでなりてうあひをう
くる事よにならびなきちんかなりかるがゆへに
成帝のうちをありあきさへてまいれ張
放が下人なりとなのりて天子なりといふ事をも
あらはしまつりそれ張放が門でうあひ
ならびなきちんかなれどもめて張放が下人なり
といへば人をおそれはなはださとおどしめされて
かくぞなのら微行ひたりそれおこんされを天子も
しろしめしとかくしてなりそめ宮中をいで微行ふみも
ぜんざいどの人をつれ車にのり馬にのりて付

鳴珮のせいなどをなびしうち徴行のふしに成帝はこれ
そのみなどりおしめてあり時はいちへいなくあそび
ありひと聚所にゆうらんしてこびうり張放が下
人となのら微行のふ事ありて海しまずせんぞまで
ちぢをはなへ御ふるまひもおろかなりとうや徴行
となるいひてう天下れみたしして万民なをあざむと
なりけんや

市里徴行
漢成帝

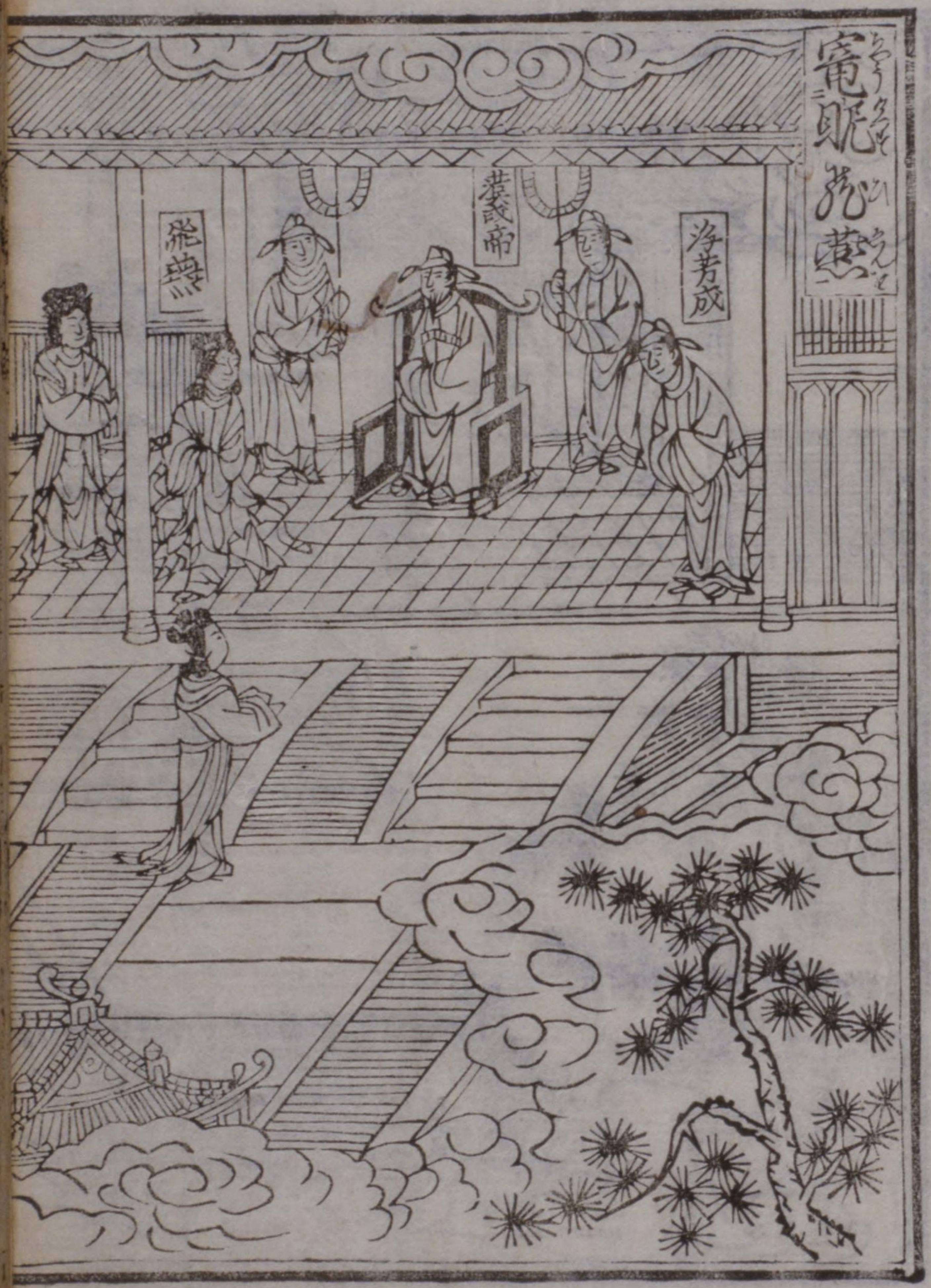
寵昵飛燕

漢乃成帝わかきときよりかふ掖中をさのむぞてさ遊
給ひて陽阿公主乃家へいでゝ給ふ所に公主乃御
うちによく舞をうたふものまひまふ女房あり其名
をがくしたるひなくよまふうちれりいさるを律まで
めれとよぶがごとくなりかるがゆへに其名をも飛燕
とこうえたり成帝その飛燕を御覧じて御心よう
よろこびしをおもひ給れるんとるふちめして
宮中へいれ給ふ飛燕をてうあいましき事よに
ならびなかりけり又飛燕がいもうとに合徳とか
せしありしよにたくひなき美人なり成帝此女をさらし

めされて又娣合徳をめしてあいし宮中にゐらせし
給へりかゝるに披香殿の博士に淳方成といふ者あり
あれはひろきりのありけり方成ある時成帝の後ろ
給ひ侍そひたてまつりてゐたりしが飛燕合徳
あの二人の女子を見るよりもすゐりちあらゝ給の内
ふしてうちひな見くだれどもこの二人は女子也
君はあまたのまざりひあり救は侍りさしてやし
そもそもそれ漢の天下も代々火のとくにさかえて天子
の位をたもちきたりしかるに此二人の女子は水
出で入り給ふ事かならず天下をかたむけんこの二
人の女子もわざはひの水よあらはるゝべしといへハ

かならず火のとくをけさんことうたがひなし
とぞ申けりされば兄弟の女子君のてうあひをうくる
事いまだいくほどもなかりけるに二人ともに婕妤の
くらゐにすゝみ給へりある時兄弟はこの思ひける
みそかにいかんとして皇后許后をざんそうして
君にうとませ申なすべきまゝれくつれさたにいよそる
あらためさとおりひそかに成帝にむかひて申しける
まことに許后宮中にて我がみことをちやう
ぶくしてのろひ給ふとうけ給はりける也しか
ば成帝此の事をいかりとぞあらゝかに糺されしを
かゝるめやと思召けり許后をうとませ給ひく

帝鑑図説 8冊 WA7-237 07-011
国立国会図書館



宮中にむかへいれして昭陽宮へうつしおき
さなちち飛燕也一乃なつきまそなへ給ふ故まつ
に君乃ごとくおや後宮天下乃まつりごとをきこしめされ
ければ人みなそれをいやしみけれども大かた谷迄
國をかたぶけし天下滅うしなひ給ふ事一同にあり
むかしより一女色をこのむこれ位をうしなふし
なふとひうりけり漢の成帝もいやしき飛燕が色
欲をいれてうあひのあまりにや后まうへなす事
むかし夏の桀王の妹喜をあいしてまた殷の紂王の妲
己をあいして天下滅び給ひしなふがごとし漢の天
下乃おとろふ事成帝よりはじまり

嬖倖戮賢

漢の哀帝と申て御門一人おはしまし其の御小侍中の
官に董賢と申者あり少年の美男なりそのかたちをかうさ
やさしくてよろづあひならびなしさればなどてう
あいふかくして常に御そばをはなれずしておきふし
むかしに心ざしあるゆゑに董賢がいせいひとしきよに
ならびなかりけりある時御門董賢が膝をたてゝ
ねさせ給ふとおほしめしすかさずおきせんとし給ふ
に御衣なりしをあまりにあはれみ給ひていかにあはれめしも
おどろかさじとて御はさみにて御袖をきりておきさせ給ひける
是もよく人にいふまで見れめいもそむかじとて

いさゝかのとがもなかりけり又これをゆるしたまひけりおさ給
まし〳〵けるにふくのざうぐあつかひは金ぎんのうはゞ
ことのあまりにおごりけれは世とりそろへて董賢が家へ出
かり給へ王このともかりの臣下に鄭崇と申せし
ありしかはありし君董賢をめしてうちあひましくてか
座うにあるまゝせ給ふ故にそこをいさかめ事ぞ
と君をいさめしかどもみかどおほきに心にかけせ給ひ
てさいはち鄭崇をめしとり獄へ入させ給ひけり
あはれなりかるかな鄭崇もとこのかんざうかうむりて
久しく獄舎のなかまひとりして身のはてを
はつれもかまはぬみかどにそれ哀帝

御くらゐにつかせ給ふそらしめ天下のまつり
ごとをあらさらかふかくそのみちをおこなひて明
君といはれ給ひしかども董賢をめしいさせて董賢を
てうあひましますゆへにはなはだよわひ川く君
徳をくらまし給へり

漢哀帝
董賢
鄭崇

十侍乱政

漢の桓帝とて一人の御門ありしがこの比中官より封ぜらるゝもの五人あり左悺具瑗徐璜唐衡単超此五人ともに侯に位をなされたりされば五侯と申なりこの折り悔しみうど宦官をもていましめ給なり後にかの五侯よりの我もくときぬ又十人をさしげてくらゐ猶あらためずしてまた君此より侍御殿して召つかひ五人のうちを高郷侯にぞかされなり又小黄門のくらゐに封ぜられし者八人ありしがこれも金銀をさしあげてもらゐを申のぞみしものぞ列八人ともに郷侯のくらゐをあげられけり

このときかの五侯の人々これにおとらじといきほひま
おごりて天下のまつりごとをとりおこなひまくにあし
てかりける故に四方の武士も侯の人にそむかず
これもしくわれまいらせんとさゝげてたからをはこびて
ありけるにこのときてんかばんみんのうちもはこ
左悺は名づけて左回天とぞ申しけり。このあと隋にて
左悺がいきほひは天子の心をうごかさんとするぐら
さんやもと左悺がちからひ深兵とうや又具瑗は具
独坐となづけたりこの人その位なかさゆへその人
おそれはなしてきうにちかばくそのてをかし又徐璜
はぞ徐臥虎とぞ申したり此人にて其いきほひをも申せば

ねむらかたる虎のごとくふせて人をふみかちてはうにちる
ばくそのてをかし又唐衡をぞ唐両堕とぞ申しけり此
うち河にてまつるわがいきほひ日に東ごまりて東といへば西
やりも西といひけるに東ひがしといふやからもその人
はうにありそいどよろいのものまくみりせうこれを
さそひとりぬさそ又左悺が兄弟そのほかの一族とともに
いうふ遊ぞぶり不當のことおこしひまゝにしてあるひ
は一國の郡守となりもありあるひは一郡の長護と
なりて人をおかしみだりいきほひおごりけりしまい
かいをむさぼり法度をやぶりて天下のあきをてくる
しめ民はことにこれを盗賊とおなじうおもひけり

なき百姓もやかしこんみげさりてまれもくと
ぬすみせられ後中常侍乃宦よ曹節王甫趙忠張譲
あれ後の人々又かのみ侯に封ぜられて天下をまつり
ごと行ひまゝに行ことおひてそうびより同類を
たてゝ我よそむ者をのあれどうめく獄へぞ入に
なり又桓帝乃ときんかふ竇武陳蕃李膺とて此三人の
ことのたし世よならびなき賢人なりなよあらく党を
子孫とひしきの三人の賢人おなしく一おかい百余人
またなんれゆへもかうりしにおとしくころちこ
ろして世の遂くがいせひ丹おごりて一天四海を
みだりなれいゆくざいくゝれどもしりしに董卓

やいひしとのまでふむかんをおこしけるみ桓帝を
おかしそまつりて漢の天下終おろかせしそれ天
下は天下の人の天下なりしや世をちかづけて佞
者をうくとかざけたる甚しかるを久しうして天下も
太平におさまるべしいか漢の桓帝を称へしやれ
おごりをきんせざりし桓へ世ぞうらんげさおこり
はく天下終うしなひ給ふとかや

十侍乱政

帝鑑図説 8冊 WA7-237 07-019
国立国会図書館

西邸鬻爵

漢の霊帝と申てみかど一人御しますが西園のうち
にあつめて一門の邸舎をたて市の店屋のごとくにし
各官位をうらせ給へり官位に大小の次第あり故に
官銭のたかも又銭の多少あり二千石の官なれば銭二
千万にうらせたまへり四百石の官なれば銭四百万にぞ
うり給ふさてまづしきものはうちばおもし官をかふ
ものども銭をおさめくいゞせしとどうさ権まこそあ
なほしなり又一県一郡をうりあたふによき所をぞ
たかくうりあしき地をばやすくうりかなふがゆへ
にさこそなりしを一度に銭をいだしてそのちち官に

のがれ又まどゞきぬものハまづなんになかりけり後
みて一倍乃利をとらしめて銭をおさめさせて後又
ひそかに左右乃人におほせられて公卿の位をうり
給ふ公卿ハそれ大官なり公乃官をバ銭千万卿乃
官ハ五百万とぞうりまゐらせて官をうらせ給へ
ば其銭なぞをたくはへあつめて西園乃内にをさめ
置て其おちおさめ給ふりそもそも霊帝乃ちの
はなんぞせうせのひて銭をたくはへ給ふ乃故へ
をられしくめげぬる小霊帝はじめいまだ侯乃位
給くおちせしとれ津ありにしもおしくて
そのかずこ様まされまするにけくらゐり

漢乃頃のふかいゑども桓帝乃時とかすうしを金銀
をたくはへ給ふ事を決してさいはひとられ事をうり
めしをおほしめされて皇后なんぞうり銭をあつめ
給へりそれ朝廷乃官位をよく賢哉とてうりてみだ
りになんにあぐる事をかはまたも商売よりもくなん
なぞ私館におよばさぞ爵をうぞ悪徳にあよばずまる事
なられ任意人よあらんもよりうもとひくわうよ
うりなはいかんや官をうりて銭をたくはへ給ふ事
そもそもいくらにあるぞされ天子て天下を太平におさ
めまつりごとをたゞしうち給ひくられ金銀さん海
きりなし給ふに銭をきくめんてよくさんにおよひ

弱ふるとハ朝廷の名器をやぶりしも八百姓の
うれひをのこせり故よりかのごとく年もたゞざりしに
天下ゆかりひかぬを人おごりてこゞれがたし乱あり
もろ〳〵りでは位をたまはりしはおかに位をうし
なひみ西園のくてりうくりんなふ銭などをみな
ちりくにおりさるぞろうしてりいをおりたり
まれ太学まどろかがたく一人さんまいあれた一
國らんをおこそとうふ付かりんもんにおとなるぞ

列肆後宮

漢の霊帝乃時は治世みだれおごりきはまり後宮乃うち
に店屋をはじめ色々のたからものをてんやに
たがひにはりあひ店をかまへしつらひて枝てん
やへいでゝいちまちりてあきなひとうりかひをな
せしありさままるで珍なふ文めうなるにんぎてん
なれうちへはいりもされけれ是乃うちにもの孫ぬすみ
ぬすびとのやうにそひてゐんらうとをとらへて見物せり
あれ後ことといちまちにてあさびとのむらがりそふ
もやうにおとなしかりむや霊帝又商衣をあらためあき
なひとなりていりたまひきうへはとも宮女をめし

つねなくして酒の市へさらせてあひてれさう
かりれ宮のしもとやをそこなひとりや故に夏帝
乃ら妃奸人邪慝れ人あやまちおごりまさりてとり則ち
天子をいり里をくるしめんとゝもをとうこゝそて
まりてまさりひ鼻くおごりくりまりとりや
どもも賢人をちゝづけて国のまつりごとをさう娩たさ
をとゞとあけられ宮中より遊楽していやしきあさ
人あていをまちひ筆物乃かんむりをちやうら邪な
ふかうせあさひ川くゝげりゝくゝ川を滅とりやふれ
あらいしやうを殺されて我とうゝ様をおしひまう
よ志ださせあり行がゆへ入りだんこうんでゝをおそ

ませぬ上人あやまち世入りおこりて瀬乃天下をうしなひ
なりあれ夏帝の則ちめがあくにとゝ姉おし

帝鑑図説　8冊　WA7-237　07-025
国立国会図書館

芳林営建

魏乃明帝と申す御門一人おはしましけるが、はじめに
すみ給ひてよりおほきさに宮殿をはくらみ給ひけん
やけうせしかされてなきうち許昌宮をはじめ又洛陽
宮をたて給ふ故に天下のたみどもやすからず
いにしへまで数年やもをまうひまもなし又秦漢乃代よ
長安城の中にありけれし鐘架銅橐駝又銅人
露盤よりはじめのこらず洛陽へうつされけり後の
ふ銅をとりておほきなる人のかたちをいて光仕翁仲
と名づけ司馬門のほかれ右ひだりぞおきさたまふ又銅を
もつて黄龍と鳳凰をいてまれを御殿乃まへにおき

給へり又一簇の土山を芳林園の中にきづかせ給ふが
あまりにじやうじゆせん事をおぼしめされて
公卿の官人おそくへあかり臣下をきらはず
いふさ挽あまひてつちをもちはこばせ給ひける故よ山
れどなくしやうずも志をれたがはかりくれ草木をあり
あてかの山にうへ又とりけだものをはなちてその
山乃うへへはなし給ふこれはあたかもうみとこの山に
あそびなど給ふに高堂隆衛覬董尋この三人の臣とい
さめてさんぜんとするありたいさめの書をもりいあるこそ
まつりもうけたり明帝これをいれおほしめさずしかるに
おごり給ふ事はなはだしやむ事なかりけりこれに

天下だんらんのかたちを見給ひ又公卿のちやうらんも朝
廷の臣よりしもじもところの臣のかくかくへ土を
おほせ山をはくらせ給ふ事これ人の君として臣
下をはうふよまいをもつてもろのみちにあらずめ
されを明帝はくらゐなりはかり給ひていまだいく
ほどなかりしにはやく崩御ましくて又清ころなる
臣ばかり給ふ代づぎの太子をかりかり故に魏の
天下はおまし司馬氏にうばゝれ志ろかたうのはうじ孫
にてつくりおふ蒋仲又土山のふくおそびたるして
おれハこれが為ぞや

帝鑑図説 8冊 WA7-237 07-028
国立国会図書館

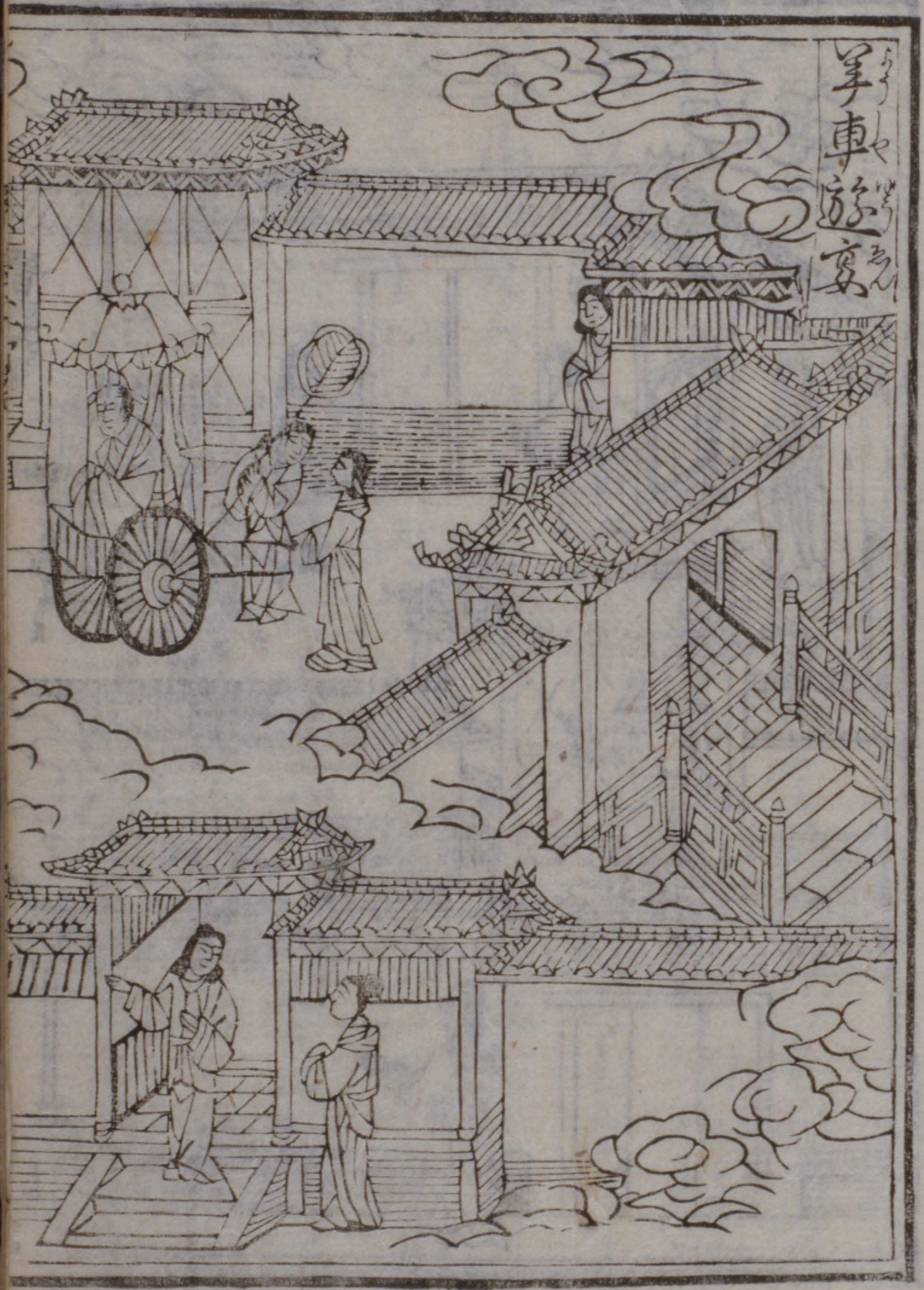
羊車遊宴

晋の武帝と申てみかど一人御ましまゝが呉国のてき
をうちほろぼされてよりは遊宴におぼしめされける
ゆゑいかにとなれば天下一統になりて四海太平に成おさまり
ぬればとて御心の志はいかにしとおぼし召されける
あひざけあそびにふけりひまなくてあけくれゆう
らんをこのミ色をこのミてきさきのしゆう天下の
まつりごとも御おこたりにて後宮の宮女に
一万人のきさきあり故よあまたるをてうあい志給へ
どあまたのうちにありければいづれへ御入あるへて
この故羊のみけにめされきさきの御かたへ

帝鑑図説 8冊 WA7-237 07-029
国立国会図書館

ぜいゆきをせし後のふるまひとは世乃うちにハかなかた
こゝろにかなひし後ハいふにおよばずあまねく
くわまふめさまでひさしにこれをひろめつゝたがひに
孫を後でまかしくてかの筆乃ゆきをやぶりまいらし
取れ御使が孫にいひせ給ひてとかくちらし申さんと
りよとしぜひゆうらんまじくてたのしみ給ふて
ちかづきしものゆへうきさ紀なち君乃み心なれば
ねがひまなびたまひてあるひハ竹の葉をとり流がし乃
にごりなさし又ハ手水のうち竹の葉をとり筆をさ
海孫きそふもありけるひとりしかくげに何事がな
孫乃かとりにそくぎハしれまことにまち

給へりとよりて筆ハ竹乃葉をものこしかをとこの
むかしのあれざいかんめでもして立川しなをま孫きミ君
乃車をやどめおきてうあひなさえんがあめとうや武帝
うなうふかいらんにおごり給ふゆへ国家乃政事
をあさめるにいたずらに武一乃人のさ得れのちくに
楊駿とやしありきらう御はまた楊駿こ川乃朝廷乃かん
あいをとり天下乃まつりごとをはかりしひまなくして
ひかりいせひとりおごりぬまで肉食のんでをこなり
楊駿よおそれ後にかゝりけり故ま朝廷乃まつり
ごとも洞賊くふことぐれあるまじやとおもふ所なり
やうや又武帝乃太子ハ恵帝と申せしありさまを悪



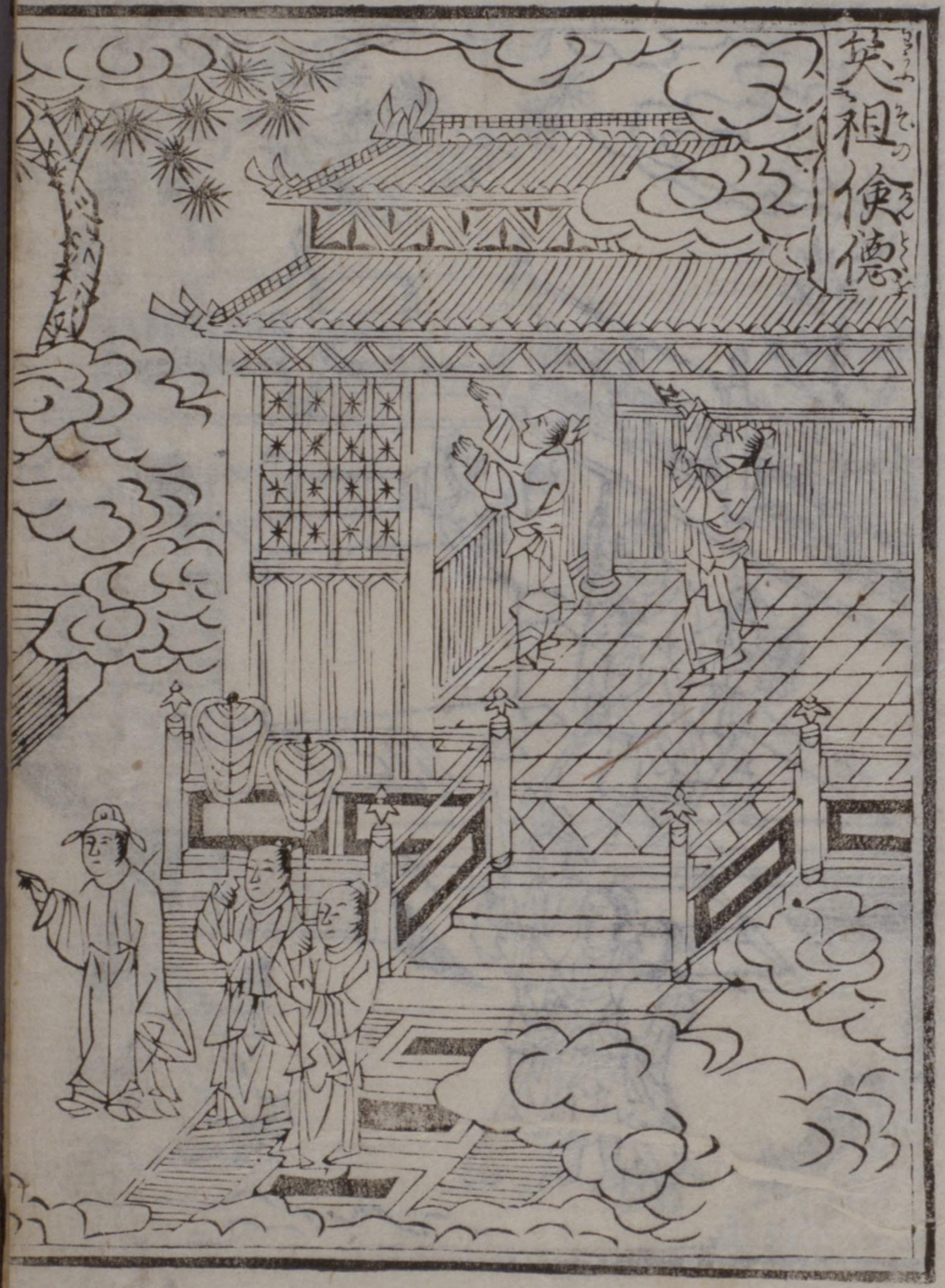
恵帝ぶだうにましますゆへ、あひだもみだりがはしくむほんを
おこして五胡の乱おこり、いくさおほくしてやまのわざ
はひとゞまりけり。しかれども武帝
そもそも呉国をたいらげ給ひてより、よくそのこうを
たのしみ、あそびをあぐしたまひ、おこたりましましゝ後
さりながらてんかいよいよおさまりて聡明のみことあれ
ど建業の政しさいなくして、あまつさへ楊駿がとき
の孫いだんをとらいで政をもちいらるゝ故に、天
下にらん者きもとをまねきたりとまうしつたへたり

芸祖倹徳

宋の列聖とて後門一人ありしが、もとより宋苑
をこのませ給ひて先祖乃いそおろ出し宮殿を建よ
あれいやしうして、あしにせまさきを、まちてせ給ひて
とおりうちありさまり。文殿をいとあを宮方の墻壁柱
などふいでまで錦をもつくりみをきもいつ
かたり給ひなり。故ゝ高祖乃とえまに海ある志給ひし
此殿をぞいけ列聖の時まいりてあづけて寝室と
いふり給ふにこの寝室みても高祖乃御服をおさめて
おさ給ふあるときに列聖此寝室をひらかちて玉燭殿を
ばくら擬なりりんとありしめしり給く乃臣下誡

めしつかひん志川小はだゆさなされて兄孫へぞ康の
かくりたる一川のつちどありみかきれしんてりや
一川乃灯籠をかけておけり是烈葛布なとをかけて是を
名れ里又かくさちうみて蠅払をかけてとく是麻のお
也の川あ見めりか屋うに高祖のと紀ゆゑよるつ川乃
うけ玉ふのまてもすうしをかざり御しまさせ孝武は
あれ也とみてめて後の子孫まで志めしていましめ也
られ孫へりあくに袁顗とやしあんうありけよし
見るよりも高祖乃ふ川きまたぞり錦をも蛍をかあ
たそまつりあいまり列強のおごりをいましむ列強也
よしさうしめし祭を孫へてありけ後乃ろうりへそれ

高祖もいやしき農人にて御耕作ありしなればなりとれ
天子の位をもつらいうり孫へり故位をうけとく
御しまかどもい屋しきと紀乃あく孫をむもうしを
まもれおし後さぞありくてられ灯籠蠅払なども高
祖のぶん見うたひうりちうおまいりまかくらゐと
おぼし屋うにおもりん事いふまじとぞありけ
第り故よくうおふ律りせ孫ひてよりいまぞ一度も
まだ氏ぢりしに玉燭殿乃うちにしてはおふむおもを
おり錦ふその仏子よ子業とやせしかりくらゐより
律り後おふとい色どもあくぎやくぶたうに後し
まをゆへあちまち天下をうそわれて位をうしなひ



をひなりそれ天下の君たる人ハいさゝにおごり
侮しま欲ばまぎりひ志そんりおよぶ事あれば
よくつゝしむべし

帝鑑圖説巻第十終

国立国会図書館
帝鑑図説　8冊　WA7-237　07-035
国立国会図書館

帝鑑図説　8冊　WA7-237　07-036
国立国会図書館